

幻の蔵書

—豊後田染河野家蔵書寄進目録をめぐって—

後藤重巳

一、故林章先生の蔵書

林章先生が逝かれて早くも九カ月。月日の経つことの速さをつくづく思い知らされる。

先生は、史学科が発足して一年目の昭和三十九年四月から、非常勤講師とられた如く思われているが、それは一年目に、専門科目が開講されていなかったからの事で、先生は、発足当初からの正式メンバーであった。

こうした関係から、先生のご自宅を訪ねさせて頂く機会が少なくなかった。

先生は、その頃、私立大分城南高等学校の校長を勤められていたが、学究の人であったから、ついにその職を抛って、史学科の専任とられた。昭和四十九年四月のことであった。

先生のご自宅は、玄関のドアを開けると、先ず、二階への階段の両側に、二階まで書籍がびっしりと積まれていて、本の間を二階へ昇降するという状態であったが、それにも増して驚かされたのは、先生の書齋であった。

玄関を入り、居間に通ずる廊下を少し進んで、左側にあるその書斎は、名ばかりで、三方の壁は天井近くまで、書斎たるべき空間はほとんどない迄に書籍が積まれる倉庫であつた。

部屋の入口近く、コーヒテーブルを中に、二、三脚の椅子が置かれ、少しの空間を残して、他の全ては書籍の山・海・そして壁であつた。

今回、別府大学附属図書館に寄贈された書籍の量だけから考えても、あれだけの書籍が書斎を中心に、ご自宅の内に所蔵されていたことを考えると、不思議であり、先生の書斎の状況は、おおよそ想像がつくだろう。

雑誌の旧号を含めたご遺族からの寄贈書籍は、その整理も終り、近日中に目録も完成することの故、その結果、先生が集められた書籍の全ぼうが明らかになることであろう。

先生は、昭和五十四年四月以降、図書館長を連続して四期八年も勤められ、続く任期の途中で病にたおられた。館長在任中の先生は、図書館宛に、もしくは、先生個人宛に送られてくる出版社、書店、古書店の図書目録

には、良く目を通されていたし、それを見られて、「これは必要」と判じられた書籍は、購入発注をなさつていった。

先生のご専門分野は、中国中世史であつたが、購入を指示された書籍は、史学関係では、むしろ考古学・古代史・近代史・朝鮮史にかかわるものが多く、いわゆる「東洋史」にかかわる識見の大きさにはおどろかされた。勿論、東洋史・日本史など歴史書ばかりでなく、美術・美術史・民俗学にかかわる書籍にも強く関心をもたれ、附属図書館の内容的充実に意を注がれたことは、周知されるとおりである。問題は、今回、先生の「遺

品」として大学図書館に寄贈された多大の書籍や、館長在職中に、大学図書館としての質の向上をめざして積極的に購求を奨められた書籍を、如何に活用するかと云うことが、先生のご意向に報ゆる問題となるう。

さて、先生の所蔵書籍の内容については、先生のご生前には知る由もなかったが、今回、その主要書籍のご寄贈による整理、目録作成の結果でほぼ明らかになった。これらの書籍は、先生がご生前、いかに整理されておられたのか。

学生や史学科の教員が、時折、先生に書籍探索の相談を申し上げると、附属図書館や研究室にない書籍の場合、二、三日して私蔵の書籍を持って見えられたものであった。うず高く積まれた私蔵の書籍の中から、一体どの様にして、目指す書籍を探されるか、今もつて不思議でならない。先生はよく、「そのうちに目録を作らなければ」と申されていたが、先生自身でもお困りの場合があったのかも知れない。

私たちは現在、書籍や史料を一覧する早見の方法として「目録」を作り、また作られたものを利用する。文字・書籍の国としての中国では、すでに前漢時代に、書籍の類別・部類・版刻などを研究する「目録字」が成立していた。書籍目録は、多量に所蔵されている書籍、もしくは叢刊の書籍を概観する上で、書籍の内容索引とともに不可欠な価値をもっている。

さて、私たちは、書籍目録の身近かな例として『浦子私記』を知っている。これは、江戸時代を代表する郷土出身の学者、三浦梅園が目を通した書籍の目録とも云えるものである。

これ以外、類外の書籍目録は措くとして、私たちは、旧家の文書調査の折などに、しばしば、「書籍目録」に遭遇する。その場合、もはや書籍の現物は散佚して、目録ばかり残されている例が多いが、その目録を見る時、

その書籍収集者の家職・身分・知的水準などを知ることが出来る。

二、河野家の蔵書目録

豊後国東郡田染組(現豊後高田市)の河野家は、寛文期以降、肥前島原領五組大庄屋の一家として知られる旧家である。この河野家は、古くは、伊予河野氏の流れを汲む家といわれ、江戸期大庄屋の屋敷跡を今日に伝え、その末裔に当たる方が、現存されている。

この河野家には、「河野氏系図」のほか「水鏡」「年代記」⁽¹⁾など、若干の文書史料が保有されている。

河野家は、代々、島原領豊州飛地の田染組の大庄屋を勤めていたが、大庄屋として、当然のことながら、田染郷社の元宮八幡社と深い関わりを持っていた。

「河野家年代記」によると、第八代通衛の嫡子厚蔵は、病弱のため家督を相続せず、元宮八幡社の宮司職となり、豊後蔵人と改名、本家から終生二人扶持の給付を受けることになった。彼は天保十二年死去し、その後八年程は、社人は絶えたが、嘉永二年、元甫の四男、岩男を立てて、社人とした。

田染大庄屋家は、厚蔵が社人に出たあと、通衛の娘に長洲大庄屋本多家から新三郎の二男久治(のち成通)を養子にとり家督を継がせ、その子通達はその跡を、そして通達の跡は、同領佐野村の医師安東宝策の子欣平を迎えて家督とした。この欣平は改名して通郷と名乗り、第十一代当主となった。第十代通達は、中風を病み乍らも長生きし、慶応四年三月、七十一才で死去した。

「河野家年代記」の慶応三年十一月の項に

十一月中、通達肝煎之神書百六十余冊を、三所八幡宮宝蔵ニ奉納する。

と云う記事が見え、伝世する河野家文書の内にその奉納蔵書目録が現存している。

「河野家年代記」は、文禄二年（一五九三）にはじまり、明治二十六年をもって擱筆されるが、その内容は、古い時代は「豊陽志」などの軍記物から記事を借り、全体を通じて、金石文・棟札・他家家譜・田地売買証文、墓碑・位牌などの関係史料をもつて構成されている点からして、年代記を編述する折に、遺存していた蔵書目録をもつて、年表的記事として登載されたことは云うまでもない。

以下、その目録を掲げる。

「神道集」	安居院作	八卷
「神拝恐惶鈔」	多田義俊著	一卷
「倭姫命世紀」	「」	一卷
「神家常談」	真野時綱著	三卷
「神代口訣」	忌部正通著	五卷
「神皇正統記」	北畠親房著	六卷
「纂疏」	藤原兼良公撰	二卷
「天書記」	浜成撰	一卷

「太神宮心ノ御柱記」	「度会行忠」	一卷
「神別記」	「忌部浜成」	十卷
「唯一神道名法要集」	「卜部兼延」	二卷
「類聚神祇本源」	度会家行著	十五卷
「神祇拾遺」	「卜部兼滿」	一卷
「本朝神社考」	林道春著	六卷
「神祇啓蒙」	白井宗周著	八卷
「和学通」	留友友信著	二卷
「真字弁」	多田義俊著	一卷
「神道弁惑」	持宝院聖応著	二卷
「神代卷風俗抄」	泰信慶著	
「神代卷風葉集」	山崎垂加著	十卷
「神代卷秘要抄」	多田義俊著	二十卷
「神代卷 ^(註) 髻華山蔭」	本居宣長著	一卷
「古事記伝」	本居宣長著	四卷
「三紀弁」	多田義俊著	一卷
「古史通」	源君美著	五卷

「読史余論」	源 君美著	九卷
「本朝世紀」	信西法師著	一卷
「古老口実伝」	「度会行忠」	一卷
「宝鏡開始」	「」	一卷

以上、二十九種約一七〇巻に及ぶ書籍が、どのような経緯で集められたかについては、知る術はない。恐らく数代以上に亘る年代をかけてに集められたものと考えられるが、それも推測に過ぎない。

右の二十九種の書籍のうち、「神皇正統記」以下、九種については、「此代金」として購入価格が記されている。それを一覽したものが章末の一覽である。うち「唯一神道名法要集」は、旧木板本があり、これは二冊で刊行されているので、⁽²⁾ 目録に「二巻」と見えるところからして板本であつたものと考えられる。「神社啓蒙」も、寛文十年（一六七〇）に刊行されているから、刊本と考えられる。また「古事記伝」は、寛政二年（一七九〇）から文政五年（一八二二）に亘って、刊行がなされ、広く世上に流布している例からして、これも刊本の購求であろう。

目録の但し書きによると、「読史余論」の項には、「板本十二冊出来」と見え、明らかに木板本であつたことが知られる。その外、目録に見える「神家常談」（貞享五年刊）や、「神道弁惑」（天明五年刊）なども刊本となつてい
たから、それを収蔵していたものかと考えられる。

書籍の購入価格については「神社啓蒙」「古史通」「読史余論」が「一両位」と記されているが、「古事記伝」

は十一両と驚異的な高値となっている。

三、河野家所蔵神道書の内容

これらの書籍のすべてについて、逐一、解題を加えるゆとりはないので、ここでは、その中の数点についてとりあげ、集められた書籍の性格についてみることにする。

(イ)「神道集」。延文期(一三五六～一三六〇)頃、安居院流の者によつて書かれたものと考えられ、諸国の著名な神社の縁起、由来、本地などを説話風に説いたもの。全十巻から成り、その中に五十篇の話を収めている。

この書は刊本がなく、古本・流布両系統の数点の写本がある。

流布本系統には、東洋文庫本、豊宮崎本及び河野本があるという。⁽³⁾

田染河野氏蔵書のうちに、この「神道集」が含まれていることには、一つの大きな理由が考えられる。それは、「神道集」第六巻に、「河野氏の氏神たる「三島大明神」の縁起が収載されていることである。

周知のように、河野氏の本貫は、伊予であり、水軍神としての「三島大明神」を大いに崇めた。「神道集」中の流布本の一つに、「河野本」の存在するのも理由なしとしない。

もちろん、目録に見える「神道集」が、いかなる内容のものであったかについては、明らかになし得ない。

ただ目録によると「八巻」とあるので、研究的に云われる「河野氏系流布本十冊」とは、数量的に齟齬する。

(ロ)「倭姫命世紀」。伊勢外宮に累代奉仕する度会氏によつて唱導される「度会神道」(伊勢神道)の教典の一つ

であり、「天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記」などととも、いわゆる「神道五部書」を構成する重要教典の一つである。本書の編述の年代には問題はあがるが、その奥付に「応永二年」（三九五）と見え、室町時代初期には、成立していたものといわれる。⁶⁴⁾

(イ)「神家常談」。三巻から成り、貞享四年、尾張の真野時綱によって編述され、翌五年に刊行された。本書は、日本書記神代巻や伊勢神宮の神道書などに見える神勅・神託から、神道の教理を平易に説き明らかにしたものである。

(ニ)「唯一神道名法要集」。本書は、吉田神道の根本教典の一つとされる名著。著者については、卜部兼延とも兼俱ともいわれる。その内容は、神道の体系を組織的に整理し、その哲学的な教理は、「神道大意」とともに、吉田神道の教相を示した第一級の教典である。

(ホ)「類聚神祇本源」。正応二年（三三〇）度会行家によって編述されたもので、その根本理念は
 凡神者以_二正直_一為_レ先、正直者以_二清浄_一為_レ本、清浄者心不_レ失_レ正、不_レ穢_レ物、専_二定準_一、是以明
 光照_レ頂、靈徳入_レ掌、為_レ願盖成乎、万事者一心作也、時々奉行面々莫怠矣。

の言に集約され、北畠親房の著明な「神皇正統記」は、この理念を継承したものであるという。⁶⁷⁾

(ニ)「日本書記神代巻」。

『神道書籍目録』⁶⁸⁾の索引などを繕くと、「神代巻口訣」をはじめ「神代巻〇〇」と題する典籍が、いかに多いかに気づく。

忌部正通の「神代巻口訣」や一条兼良の「日本書紀纂疏」などは、早く室町時代に編述されたものであった

が、戦国期を経て、近世期に入ると、神代巻口訣に関する書籍の数はおびただしいものになった。

河野家の目録の内には、「神代（巻）口訣」「日本書紀纂疏」（目録では、単に「纂疏」と見える）も含まれている。また、同目録中には「神代巻風俗抄」をはじめ、「神代巻秘要抄」「神代巻風葉集」「神代紀髻華山蔭」など、日本書紀の主要な部分を占める註釈書が見られる。

この外、本居宣長の「古事記伝」をはじめ、源君美（新井白石）の「古史通」「読史余論」などの史論書も含まれている。

四、待たれる探索

埴保己一による「群書類従」正編五三〇巻六六六冊、続編一一五〇巻一一八五冊のうち、正編の出版完了は、文政二年（一八二五）、後編は、同五年のことであった。

河野家蔵書のうち、この群書類従の正・続編で上梓されていた書籍には、「倭姫命世紀」（続）、「神皇正統記」（正）、「唯一神道名法要集」（続）、「神祇拾遺」（続）、「本朝世紀」「古老口実伝」「宝鏡開始」（ともに正編）などがあり、これらは、群書中の版本であったかも知れない。

当家の蔵書は、二十九種一七〇巻であるから、数量としてはさして大部なものではない。

しかし、前項で見て来た如く、その内容から考える時、神道書としては、質的密度の高いものといわなければならない。

特に「神道集」などに至っては、地方の一社人が、平易に入手できるものとは考え難く、その他「倭姫命世紀」「心ノ御柱記」「唯一神道名法要集」「類聚神道本源」などは、極めて質の高い「神道書」と目されるものばかりである。

近世期には、各地の大名・篤志家や好字の徒などが、多数を書籍を収集した例が多く知られている。また公的機関としての藩校も、書籍収集の機能を持っていた。

例えば、杵築藩校字習館の旧蔵書籍を一覧したと思われる「学習館所蔵目録」によると、その収蔵書は「国書之部」「漢籍之部」「洋書之部」に別けられているが、「国書之部」には、古事記、六国史・風土記をはじめ、三三種六三〇巻の国書が見えているが、神道書は、全く見られない。

今一つ、当家蔵書の特つ特色は、その内容が良質であると同時に、儒者などが著作した俗説的な神道書がほとんど含まれていないと云うことであろう。

周知の如く、近世期の伊勢神道（度会神道）は、各地に「御師」を派遣し、神道教宣につとめた。従って、度会家の神道学者も、庶民を対象とした多くの平易な神道入門書を著作している。このほか、国学者・儒者などによる神道入門書は、江戸期を通して、まさに山積する程多く著作された。

こうした情勢の中で、河野家の蔵書が良質であることの背景には、当家が実に多種多様な書籍を所蔵している内から、元宮社に奉納したものは、「精選」されたものばかりであったと云う理解も出来なくはない。

田染河野家は、島原藩豊州飛地五組大庄屋の一軒として、橋津組大庄屋橋津家と深い姻戚関係にあり、また、杵築藩の学者の家、島家・小串家とも関係を持っていた。¹⁰⁾

橋津家・河野ともに、幕末期の当主によって、それぞれ「執腕録」「田染水鏡」が編述されたことは、つとに知られるところである。¹¹⁾河野家では、更に「河野家年代記」「河野家家譜」が作られ、家意識の上に、好学の徒が少なくなかったことをうかがわせる。

河野家は元宮石仏で知られる田染中村の田染八幡社に隣接する広大な庄屋屋敷を所有し、それは現存している。¹²⁾

同家屋敷内に、幕末から、明治期にかけて、「桑納学校」が営まれていたことも知られるところである。

河野家の奉納書籍は、聞く所によると、神社側には現存しないという、しかし、あるいは、神庫の奥深く眠っているかも知れない。それが確認できない限り、河野家の所蔵書籍は「幻の蔵書」となる。

註

- (1) 後藤重巳「田染水鏡について」『史学論叢』第十一号、昭和五十五年。
 - (2) 安津素彦編『神道辞典』同項目解説。
 - (3) 貴志正造解説『神道集』解説。平凡社「東洋文庫」所収。
 - (4) (2)及び河野省三著『神道の研究』。
 - (5) (2)に同じ。
 - (6)・(7) 『神道の研究』
 - (8) 加藤玄智編、昭和十八年、同文館出版部刊。
 - (9) 別府大学文学部史学科所蔵。
 - (10) (1)に同じ。その外、後藤重巳「監郡右置と執腕録」『別府大学紀要』第十六号。同「封事太宗と杵築藩」『別府大学紀要』第二十一号など。
- 後藤重巳「飛地領支配の問題点」『史学論叢』第七号。同「封事太宗」別府大学附属博物館刊。同「執腕録」同館刊の解題等参照のこと。

神皇正統記	二歩位	神代卷髻華山蔭	二歩位
纂疏	二歩位	古事記伝	十一両位
唯一神道名法要集	一匁二歩位	古史通	一両位
本朝神社考	三歩二朱位	讀史余論(板本十二冊)	一両位
神社啓蒙	一両位		